

大浦湾のチリビシのアオサンゴ群集と長島洞窟の調査を行い天然記念物に指定することを求める意見書

大浦湾のチリビシに、大きなサンゴ群集があることは地元の漁師には知られていたが、2007年に環境保護団体（公益財団法人日本自然保護協会）によって調査が行われた結果、長さ50メートル、幅30メートル、高さ14メートルに達するアオサンゴ群集だと判明した。しかも、このような規模にまで成長することは世界的に報告例がなく、遺伝子解明では、2008年に石垣島（白保）のアオサンゴ群集の遺伝子型、2017年には、勝連半島周辺に位置するアオサンゴ群集とも異なる遺伝子型を有することが分かった。これらの研究結果は大浦湾に存在するアオサンゴ群集は唯一無二のかけがえのないものであることを示唆した。

一方、辺野古崎沖合に位置する長島の洞窟の存在は地元の人々に知られていたが、2014年、藤田喜久氏（沖縄県立芸術大学准教授）が同洞窟を調査し、サンゴ礫が付着した鍾乳石があることが確認された。その写真をカルスト地形の専門家である浦田健作氏（九州大学／日本洞窟学会元会長）に提供したところ、「このように石筍にサンゴ礫が付着して成長した鍾乳石は珍しく、日本での報告例はない」と、より詳細な調査の必要性が指摘された。日本自然保護協会はこれを受け、2018年8月31日、公有水面埋立承認撤回に伴う工事の停止を受けて、再度、緊急に辺野古海域の調査と長島洞窟の地形と堆積物の状況を記録し測量を行った結果、辺野古周辺の地域が数万年から数十万年にわたる海面の変動に関連した自然史の解明につながる可能性の高い場所であることが分かってきた。ただ、その証明には、地質学や生物学、洞窟の専門家集団による多角的な調査が必要である。

大浦湾・辺野古沿岸一帯は日本自然保護協会が中心となり、生物多様性豊かな地域であること、文化と歴史があること、地域を中心に多くの人たちが守ろうとしていることをアピールし、アメリカの著名な海洋保護団体ミッション・ブルーによって世界で117番目、日本で初めてホープスポット（希望の海）に認定された。日本で初めての認定を受け沖縄県としても自ら主体的に調査を行い、その場所を天然記念物に指定、保護し、世界へ伝え後世へ残す取組が今、求められている。

よって名護市議会は下記の要請をする。

記

- 1 沖縄県は生物多様性の豊かさを象徴する大浦湾のアオサンゴを調査し天然記念物に指定し保護を求める。
- 2 沖縄県は沖縄の自然史解明につながる長島洞窟の調査を行い、天然記念物に指定し保護を求める。
- 3 名護市は豊かな自然環境を後世へ伝え残すためにも沖縄県の調査に協力することを求める。

以上、地方自治法第99条の規定により、意見書を提出する。

令和2年12月21日

沖縄県名護市議会

宛先 沖縄県知事、沖縄県教育長